

3 日本における国際看護学教育で強化及び補完が必要な分野に関する文献検討

Literature review on fields that need strengthening/complementation international nursing education in Japan

○長嶺めぐみ¹, 大植崇², 山田智恵里³, 森淑江⁴

Megumi Nagamine, Takashi Ohue, Chieri Yamada, Yoshie Mori

1 群馬パース大学, 2 兵庫大学, 3 福島県立医科大学, 4 群馬大学

Gunma Paz University, Hyogo University, Fukushima Medical University, Gunma University

【背景と目的】

日本における国際看護学は、現在の指定規則では統合分野の中に位置づけられており、各校は授業に取り入れている。しかし、国際看護学関連の科目が全国で十分に教授されているとは言えない。この状況の背景には、国際看護学で取り扱う内容が多岐にわたり、その全ての範囲を教授できる人材が少ないという特性がある。従って、多くの看護師養成機関において国際看護学教育は限局されていると予測される。そのため、全国の看護師養成機関で教授の強化が求められている内容を明らかにし、その内容を補完する教材の作成が期待される。

そこで本研究では、日本における国際看護学教育に関する文献の検討を行い、その研究動向などから日本の国際看護学教育で強化・補完が必要な分野の示唆を得ることを目的とした。

【方法】

文献検索エンジンは、医学中央雑誌 WEB 版、および CiNii を用いた。キーワードは「国際看護×授業」「国際看護×カリキュラム」「異文化看護×授業」「異文化看護×カリキュラム」「多文化看護」「多文化看護×授業」「多文化看護×カリキュラム」とした。2010年1月から2020年7月までの10年間を検索期間とし、会議録を除いた。重複した文献を整理し、抽出された113件のタイトルおよびアブストラクトを読み、研究目的に合った37件の論文を対象文献とした。文献は、①題名②著者名③掲載雑誌④発表年号⑤研究目的⑥科目名⑦方法⑧結果・考察⑨備考の内容で文献カードを作成した。

本研究は、すでに公開されている文献を対象としているため、研究者所属機関の研究倫理審査を受けてはいない。

【結果】

対象となった文献の内容と文献数を表1に示す。

文献内容	文献数	
各大学における国際看護学教育の現状報告	9	
海外看護研修報告	8	
国際看護・活動に対する学生の意識調査	7	
大学院教育	演習・実習	2
	カリキュラム	2
国際看護学教育の研究動向	4	
留学生受け入れプログラム	2	
国際看護学の科目実施状況調査	1	
米国異文化看護プログラムの紹介	1	
EPA教育の課題	1	

研究の動向として、「各大学における国際看護学教育の現状報告」など、科目実施の報告及び演習実施の報告や、「海外看護研修報告」が全体の約半数を占めるなど最も多かった。研修報告の中で

は、日本では宗教について考える機会が少なかったが、海外では患者の宗教についてのアセスメントは必須であることを学生は学んでいた。続く「国際看護・活動に対する学生の意識調査」では、学生の多くは、渡航経験を持たず、言語に対する不安を抱えており、このことが国際活動に対する関心の薄さにつながっていると指摘されていた。学内において日常的に国内外の異文化に接する機会を設けることで、関心のない学生に対する刺激となる可能性が示唆されていた。「国際看護教育の研究動向」において、全国の看護系大学における国際看護学に関する教育実施状況の調査では、教育内容が途上国での協力活動が中心となっており、在日外国人医療という内なる国際化への教育が不足していることが指摘されていた。また一貫した教育方法が存在しないため、担当する教員の考え方によって、授業目標・授業内容・教材に差がみられていることが指摘されていた。

【考察】

研究の動向として、授業・演習・海外研修の実践報告が多くを占めていることから、国際看護学の教授方法は、学問として体系的な研究がされていないことが示唆された。

近年、日本における在留外国人の数は増加傾向にあり、これらの人々が日本国内の病院を受診する機会も増えていくことが予測されるため、在留外国人に対する医療の授業の充実が求められる。今後多くの外国人患者と接するにあたり、宗教に対する理解やアセスメントを行う能力の強化なども必要といえる。

またより多くの学生に興味を持ってもらうためには、学生が抱えている言語・異文化への壁を取り除くような授業が求められているといえる。語学面のフォロー・強化や、留学生・研修生の受け入れや交流など、学内で異文化体験ができる機会を持つ工夫が必要である。

【結論】

国際看護学において、教授方法の体系化が求められている。今後強化の必要な内容として在留外国人医療や宗教への理解、学内での異文化体験の機会、語学学習の強化が挙げられた。

【利益相反】

本研究における利益相反はない。

当研究はJSPS科研費(20K10612)の助成を受けたものである。